

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

| | |
|------------|---|
| Title | ツェルゴー : 雑録 |
| Author(s) | 温知學人 |
| Citation | 龍南會雜誌, 3 1 : 3 5 - 4 6 |
| Issue date | 1894-11-28 |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| URL | http://hdl.handle.net/2298/4469 |
| Right | |

右の受動詞の「セラレタリ」などを「サレタリ」といふは、他の「ツカハサレタリ」などの佐行の働と、大に紛はしきのみならず、邦語にあつることあれば、用ひぬ方、宜しうらん。「セラ」のかへし「サ」あれば、あしからじといふものもあれど、詞の延約は、いつこへも用ふべきものは。

ツェルギー

溫知學人草稿

二十七刀學人圈點並批評

史に曰く「ルイ十六世の時負債益々重大にあり、歳入愈々欠乏す、是に於てかツェルギーを採用て海軍太藏の大臣に任せり。ツェルギーは非常に正大なる政治家にして、而も卓見ある經濟家ありき。彼は奮て難局に處し、經費節減を斷行し、歳入増額に必要な改革に着手し、或は商業の振起を謀り、或は會社を解散し、或は農民に不利ある勞働規定を廢し、或は地方自治權を増進する等、見るべき事業少もとせず。然れども此等の事業及び其他の行政軍事に關する改革は、痛く貴族僧侶並に私利を擅にせる朝臣の反對を喚起し來り、

評に曰く、自家の所信に熱中する甚しき、此輩群小の反對力の按外強大なるを洞察するに至らざりしこの説あり、或は知らん

王も爲めに英斷を以てツェルギーを用ゆる能はず、止むなく彼をして職を退かしむ。是に於てか佛國革新の好機會終に去りぬ」と。此の如くして佛國革命は起り來れり、嗚呼實に時ある哉。ツェルギー十分に敏腕を振ひて、改革の事業を完全する能はざりしと雖も、彼をして其經綸を十分實行するを得せしめば、果して如何ありしあらんか。或は無道の革命も、恐怖の治世も來ることなくして、第十九世紀の文明を迎ゆるを得ざるも知る可らず。思ふよツェルギーも亦時勢を洞察して驟起せる大人たらざ

らんや。吾人は彼に就て幾分の研究を爲すこと、甚だ利益あることを信ず。

一 ツェルゴーの修養時代

アヌヌ、ロベール、ジャクエ、ツェルゴーは、千七百二十七年五月十日、佛國の主府巴里に生る。當時は西班牙王位繼續戰爭局を結びて、未だ其餘波靜まらず、米大陸にては英佛漸く軋轢を増し來りて、干戈に訴ふとする危機に迫り、社會の大勢平穩をちざる状態ありき。彼はミツチエル、エチエンヌ、ツェルゴーとマドゥアレニス、フランソアリス、マルチノイとの第三子なり。祖先は素と蘇格蘭の人にしてノルマンディに移り住し、門閥高く世々榮貴なる官職を奉じ勳功少しとせず。父ある人は巴里にて卓越ある行政官の名を傳せりと云ふ。

評に曰く、コルベル亦も蘇國の出身なり。之を聞く、大國は奇才多し。知らず、是れ個の小國、果して何等の人物を出す傾向ありや。

ツェルゴー幼にしてルイ、ル、グラン中學校に學びプレッシン中學校を経てセント、シニールピス神學校に入る。此後刻苦精勵すること數年、大に得る所あり。千七百四十七年學士試験に應せんとせしも、當時僅かに齡十九年余なりしかば、丁年未滿の故を以て之を拒絶せられ、大に望を失ふ。辛にしてルイ十五世の紹介を得て受験を認可せられ、翌四十八年良好なる成績を以て學位を授與せられたり。千七百四十九年、ツェルゴー、ソルボンヌ院に入る。此ツェルボンヌ院は毎年秀才を擢て寄宿せしむる

寮舎にして、宏壯麗、典籍備はらざるなし。ツェルゴーは入院後程なく其監督者に推撰せられ、又同院集會の議長に擧らる。其より十ヶ月間苦學頗る勉む。彼の『歴史上の效果より之を觀れば、モンテスキヤリ六十年間の刻苦の結果とも稱すべき名著』^{レブリ、デラア}『法律の精神』も此僅か二十三歳の少年の舌頭より迸

が出たる言語に比して、彼此孰れか優れるやを判す可らず」と云はしめ、又「ツェルナーの卓見ある、社會進歩の道理を看破したるは、到底ベーンコン、パスカル、ライブニッツ諸氏の企て及ぶ所にあらず」とまでに評せしめたる、有名の「ソルボンヌ」演説は、此寺院に於て講演せられたり。題して「人心の歴史的進歩」と云ふ。曰く「社會は一定不變の目的を有する有機的組織にして、常に之に向て進歩するものなり。曰く「社會は此目的に達せんが爲に、絶間なく進歩するものにして、決して退歩する時あるものにあらず」。曰く「社會の進歩は之を組成する諸元素が平等に偏頗なき發達を爲すにあらずんば、完備健全ある能はず」。

評に曰く、十九世紀流の解釋を以てすれば、「決して」の一字釋當を欠くに似たり。進歩とは何ぞ。間斷なき一進一退を打算し來れば終局進の方が退の方に勝つとの謂のみ。換言すれば、進歩其事の極相は一直線にあらずして螺旋的なり。若し夫れ實際に處しては——殊に古代に在ては——最も「一退」に警戒せずんば非ず。諸子幸に古代人の退守を咎むるなくして、自家の小城に安するや否を省みて可なり。

此等の議論は今日より之を考れば、大抵は普通に學者の主張する所にして、殆ど社會學の原則とも云ふべきものなれば、何等の感覺あかるべしと雖ども、吾人若しツェルナーの時代を考へて、此説を讀む時は、彼の炯眼實に驚くに堪たるものあるを知る。試に思へ、今日世に唱道せらるゝ進化説もなく、形式ある社會學もなき第十八世紀前半期に於て、社會の知識十分ある發達を爲さず、學術の進歩完全あらざる時に、秩然たる形式を有せる社會學上の議論を主張し、之を確信して社會に施さんと云ふたるが如き、豈に讚歎せざる可んや。勿論當時佛國の思想界に於て、自由民權の説漸く盛なりしが故に、鴻學碩儒の之を論說せるものあかりしにあらざりしも、確乎不刊の基礎の上に之を詳論せしは、實にツェルナーを措て他に求むべからずと云へり。

評に曰く、之をルカッラの論説の基礎に比して如何。

又全院に於て演説せる「人類に及せる基督教の効益」も亦見るべきものありと云ふ。

かくてツェルゴーは千七百五十年まで七年の間、ソルボン院に在りて、只管修養に餘念なく、神學の知識に於ては大に得る所あり。然れども彼は其僧職に適せざるを知りしかば、終に之を脱して政界に出たり。彼自ら曰く「余は生涯飯面を被りて満足する能はず」と。是れ實に彼が身を僧職に托せざりし所以なれども、抑も亦時勢急迫して、挺身社會改革の事業に當らざる可らざるに至りしにあらざるなきを得んや。

千七百五十二年以後は實にツェルゴーの改革事業は幹旋せる時代ありとす。而て吾人は其事業を觀るに先ち、當時佛國の狀態如何を知るを要す。

二 佛國の危機

佛國の狀態は第十八世紀の中葉に至りて殆んど救済すべからざるに至れり。當に佛國の危機瞬時の後に急迫し來れりと謂ふべし。是に於てか社會はツェルゴーをして厥起せしめたり。

(一) 農業の狀態 佛國の土地の殆ど三分の二は、貴族と僧侶との手裡に歸き、小民之を耕作せり。而て僧侶は土地產出の利益を専有し、放恣專制あるが故に、耕作に従事する小民は其利潤に浴すること極めて薄く、爲に彼等は熱心と忍耐とを以て土地を耕作せざりき。又當時幾多の小地主ありしと雖も、彼等も亦た僅に各自の給養を補ふに足るのみ。此の如くして國家の經濟急迫し、一般人民の怨嘆日に月に増長せり。實に當時の農民は「其主人の邸宅を仰ぎ見て失望の情に堪ず、倖にも其邸宅を負償の証文と共に焼失せしめたるに至ることあらんには」と考ふる程まで虐待せられたり。彼等は遙か眼孔

を巴里に向けて巴里の華奢を望見し、翻て自家窮迫の状態を默想せる時に於ては、その感慨果して如何にかありたるべき。

評に曰く、此等無告の野人終に却下に流れ込み、他日の大革命に際して、無頼漢を供したるも果して幾許ぞや。

之を要するに、當時より既に今日の如く、生活の爲に上より羈絆を受けず、又華奢の爲に下を虐げざる中等社會存在せず、之に加るに家畜肥料等も大に欠乏まで、土地益々瘦せ收穫愈々減するに當り、租税は却て苛刻あるに至る。此の如くして人民誰か其重荷に堪ゆるを得んや。

臨に曰く、上等社會にして下を虐ぐるは猶ほ可なり。全力以て下等社會を籠絡するに至ては、亦如何をもするに由あり。疑しくは羅馬共和時代の末世に實せ。

(二) 貴族僧侶の奢侈 貴族は人民統御の權を恃て暴虐に陥れるに當り、僧侶は之を矯正する任に當らず、却て貴族と結び暴虐を以て人民に臨めり。彼等は教育の任務を有せると共に、土地の五分の一を占有して、各々數千の人民を統御する領主權シニヤリアルを行ひ、十分一地租を徵集し、之に依りて華奢逸樂に耽りたり。此故に人民の疲弊甚しく、ツェルゴの郷里ノルマンデーに於ては、農民大麥を食し獸皮を被り、僅に饑餓を免るゝに過ぎず。史家記載して曰く、『當時當者は逸樂し、貧者は其重荷を負へり、佛國人民の四分の三が消耗せる肉類の量は、一人一ヶ月平均一斤又過ぎず、幾多の人民は肉類を料理することすら知らざりき』。思ふに其實況に至りては、恐らく吾人の意想の外に出るならん。

(三) 政府の腐敗 政府の行政は乱雜に赴きしと同時に腐敗に陥りたり。行政會議アグリメント及軍隊の位地其他高貴なる官職は皆賣與せられ、其賣與も貴族に限り許さるゝを例とせり。故を以て無學淺見者流のみ跳梁して人材其器を用ゆる能はず、志士空しく感慨の熱涙を振へり。

又行政會議の租稅賦課のことに就て之を否決せる時は、王は「ヘッド、オヴ、ジャステス」(行政會議の否決に係らず法律を通過する法)を確守して專擅の處置を強行せしうば、租稅の徵收は非常に紊亂して、負擔も爲に重かりき。今當時賦課の方法を尋ぬるに、政府は租稅の全額を收納せず、間接稅は之を租稅徵集委員に與へしかば、恰も彼等は非常なる高利を以て、金錢を政府に貸附る狀ありき。此故に委員は人民に對して隨意に稅額を増加する手段を回せり。ルイ十四世の時二千三百万リールの租稅を徵集すべきに、實際に於ては四千万リールを徵收せりと云ふ。此事實を以て之を考れば、如何に委員の手裡に奸策の行はれしか、如何に財政の不整頓を來せしか、如何に無道なる政略斷行せられしか、想像し得て餘ありと謂ふべし。

評に曰く、請貢工事の弊害多きは衆人の普知する所、況んや課稅を請貢はすに於てをや。

此の如く人民は堪難き負擔あるに際し、僧侶の如きは租稅徵收を免せらるゝ上に、十分一地租を收納するを得、政府の官職に在る者も亦多くは地租を免せられたりき。されば政府の國庫は唯だ人民の膏血を絞りとて之を充し、僧侶官吏は此膏血に衣食して奢侈を事とせり、豈に政府部内の腐敗も亦た甚しからずや。

(四)專賣特許權の弊害 佛國宰相サルリー、リセリユーは皆尙 マイカンスタイルシステム 金主義に從て種々の法令を發し、大に商工業の發達を奨勵し、之に依りて國家の經濟を豐よし、或はルイ十四世をして屢々外征に従ふを得せしめ、或は米國殖民を保護して、佛國の氣焰を盛ならめたり。宰相コルベルの時に至り、益々此主義を以て國を富さんとし大に商工業に干渉したるなり。雖も、其結果たる唯だ非常なる弊害に陥り、徒に國利民福を傷ひしに過ぎざりき。即ち專賣特許權や株なる者の弊害は工商業の奨勵と共に増進せ

り。ルイ十四世の晩年より、木材の販賣、精酒の賣捌は多くは一個人の手裡に於てする能はず、河川の引船、守衛等の賤業に至るまでも、專賣特許權規定は制裁の下にありて、或る家族の者の外は之を營むことを許されざりき。封建時代の所謂株ある者の組織益々嚴刻にあられり。此の如き規定はもと事業獎勵の爲めに發生せるものなりと雖も、其の結果たる社會の事業をして益々衰微せしむるに至り、從て人民の窮迫愈々甚しきを加へ、終に或は食を他家に求め、或は樹皮を以て食に充つる者さへあるに至れり。

評に曰く干渉も不可なれば放任も不可。吾人は抑も之を如何すべきか、曰く監督。

佛國政府の狀態、貴族僧侶と人民との關係、農工商の實況大略此の如し、佛國の社會は謂はゞ當時將に破裂せんとする睡眠火山の頂上に舞蹈せるが如く、危殆之より甚しきはなし。此時に當りて彼等を指導し救済する者あるにあらずんば、如何にしてか彼等をして安寧を得せしむるを得ん。千七百五十年に至るまで神學研究は身を委ねしツルゴーが斷然僧侶社會を辭して政界に身を投ずるに至りし所以のもの豈に偶然あらんや。

(三) ツルゴーの改革事業

千七百五十二年ツルゴーは檢事副總長に任ぜられ、後行政會議々官に轉任す。五十二年晩經式に關し行政會議と僧侶との間に爭論ありけるが、ツルゴーは「副教師長に與て寛容を論ず」と云ふ書を認め、又「講和者」Le Conciliateurと題する小冊子を刊行して、大に宗教自由を唱へ、神學說に關する干渉の弊害を辨難せり。全年請願委員長を兼ね。就職後數年間此閑職にありて、或は古文學、數學、天文學、化學、博物學等を修め、或は朝野の諸名士と交際を結び、知見を博ふし大に得る所あり。

然れども彼は終始知識上の獨立を保ち、黨派等に關係することを謝せりと云ふ。五十九年暫時の間東部佛領及瑞西に遊ぶ、ヴォルテアを見て終世の交誼を約せしは實に彼のゼネヴァに至りし時よりき。

千七百六十一年リモージュの知事に任せらる、十三年間此職に在りて政務を握り、畫策する所極多く、著大ある事業擧て數ふ可らず。彼が滿腔の經綸を遠慮なく實施するを得しは實に此間に在り。今其最も重なるものを列擧すれば次の如し。

(一)當時佛國は饑饉に苦められ饑旱地に滿る程ありき、此時に當り彼等の最も須要とする所は生活の餘裕^①を得るに在り。國家の元氣も、社會の進歩も、生活の餘裕ありてこそ之を得らるゝなれ。是を以てツュルギーは先づ縣下の人民に馬鈴薯を食用に供することを教へ、又穀物の融通を自由にして之に苦むことなからしむ。其他總ての事業に於て人民の窮迫を救済するに焦心し大に功績あり。抑も衣食足りて禮節を知ると云ふ原理あるを知らば、ツュルギーが人民に生活の餘裕を與ふることを以て改革事業の大本と爲せること、實に其當を得たるものと謂ふべし。

評に曰く、吾人は餘裕の多きを憂へず、又餘裕の少きを憂へず。一方には多きに過ぎ、他の一方には少きに過ぐるを憂ふ。世の餘裕を論議する者、須く「分配」より熟慮すべし。

(二)當時人民は生活に汲々として、なほ動もすれば餓死せんとするが如き状態に在りしにも係らず、彼等は人夫税(道造り、軍器運び等の公役)の爲めに云ふ可らざる困難を増せり。ルイ十五世の時設計せる大道路の如きは、實に沿道人民の怨嗟の間に成就せられたりと云ふ。抑も人夫税のみにても輸入四十五分の一の多額に達せる程にて、正に地租の五分の一に當れり。其負擔の容易あらざる亦た推知す

るに足るべし。是に於てツェルゴーは斷然縣下の入夫税を廢止して此痛苦を救濟せり。

(三) ツェルゴーが縣治に於て非常の苦心と果斷とを以て改革したるは實に地租修正に在り。凡そ人は自家より他人が多く特別の優待を受けるを見ては不平なき能はず、況んや他人が特別の優待を受ける爲めに自家の虐待甚しきを加ふるに於てをや。ツェルゴーの時代に於て僧侶の如き或は官吏の如き大抵は地租を除かれ、却て土地より生ずる利益を受けるを得、農民は年に月に瘠确にあて行く土地を耕しながら、年に月に嵩み行く地租と十分一租とを納めざる可らず。是に於てツェルゴーは其縣に於て貴族僧侶の憎惡あるをも顧みず地租修正を斷行し、以て一般農民の疾苦を救へり。

其他或は道路を開鑿し、或は勞働者組合を禁じ、或は農業振起の方策を講ずる等、事業の見るべきもの少しとせず。而して彼其事業を爲すや僧侶の協力を請ふて人民の狀態に就て知らざる可らざることを述べると、彼の施行せんとする處分の性質及び目的を人民に説明せんことを欲せり。

評に曰く、説者あり曰く、當時の學士皆僧侶を排斥する中に立ちて此協働心あり、何等の卓見云々。他の説者あり曰く、高等僧侶こそ言語同斷なりしも、下等僧侶中には敬服すべき人物少しませず云々。二説必しも據着せず。

此等の改革の爲めに實業隆盛を來し、人民其堵に安せざるはなかりき。宜哉、ツェルゴーの内閣に榮轉して將にリモーツ縣を去らんとするや、人民流涕して其衣袂に縋り別を惜みて休まざりしことや。千七百七十四年七月十九日モオルパの推薦に依りて海軍大臣に任ぜらる。五週目を經て大藏大臣に轉任す。ツェルゴーは

“No bankruptcy, no increase of taxation, and no borrowing”

を以て施政の方針と爲すことをルイ十六世に奏聞し、且つ事業を爲すに當りて其後援となり、改革の

事業を成就せしめんことを懇請す。實にルイ十六世の初年にしてツェルギーも改革に望を置く頗る大かりしあり。

評に曰く、古人曰く一利を興すは一害を除くに如かず、蓋し此際に欠ぐ可らざる方針矣。

同年九月十三日、穀物自由販賣條例を修正して之を實施す。ツェルギーは此條例を發布すると共に、説明書を附して其主意理由等を明示せり。是れ先例なき事項にして、實に立憲的好慣例の起原とあれり。千七百七十六年正月改革方案を奉呈きて、地方税の上に人夫税を課するの不可なること、或る階級の者に租税免除の恩恵を與ふることの不公平なること、自由貿易の實行すべきこと等を建議す。然るに此案ツェルギーの反對者ミロムシユイに漏れまかば、彼は大に之を攻撃し、朝臣僧侶貴族商人等も亦た多くはツェルギーに反對を試む。彼の後にルイ十八世と稱せられし貴公子もツェルギーに反對して一小冊子を刊行するに至りき。斯て行政會議も此條例を拒絶せまが、王は暫くの間ツェルギーを援て強硬ありき。然まども反對黨の氣焰益々甚しく、王も詮方つきてツェルギーの職を罷む。時より千七百七十六年五月十二日ありき。職に在ること二十ヶ月ありしが、中にて六ヶ月は種々の攻撃の爲に空しく之を費し、七ヶ月余は氣候病の爲に病床に消光し、眞に事業を執りしは僅に八ヶ月ばかりありき。此短日月之彼に取りて多の事業を爲す好機會ありしあり。彼れ辯難攻撃の間に立ち、殆ど孤獨の狀態に陥りて時に於て彼の爲に一臂の力を與へしは實にヴォルテアヤありき。彼が「人に與ふる書」にてツェルギーを辯護し、反對者を痛撃せしは、健氣ありし事どもあり。

其後は専ら學問に身を委ね、孜孜とて勉強し、五年の後巴里に於て溘然として逝く。實に千七百八十一年三月十八日にして、齡漸く五十有四。

評に曰く、「ステイツ、ゼナラル」の招集を去ること、僅に八年矣。

吾人は今彼の性情の一斑を記きて此篇を終らん。

(四) ツェルゴアの性情

彼は性怯懦にして容貌愚るが如く、彼の母は怯懦を矯めんとせしが、却て之を増長せしめき。曾てルイ十六世に謁して、事を奏し言語錯亂す。ツェルゴア曰く、『是れ臣の心動けるなり、幸に諒察を賜へ』と、王曰く、『卿の怯懦あること、朕既に善く之を知る』と。以て其偽あらざるを知るべし。然れども彼は特に質素朴訥端正快活ありしことに於ては、彼の親友にまで交際すること終始一の如くありしアツベ、モレールの証言せる所ありき。

彼閑暇に在る時に、或は職を退ける時に、文學を嗜好して休まざりしが、彼が天才の記憶力を表はし、明徹なる智力と健全ある判断力とを現はせしは、皆人の喫驚措く能はざりし所なり。

彼はリモーシェは知事たる時頗る縣治に苦心したり。然れども彼は給料多く政治行ひ易き知事は轉任すること易々なりしにも係らず、之を拒絶して十三年の長日月節を守る終始一の如くありき。以てその高潔無私の心事を察すべし。千七百七十年及七十一年には佛國到る處饑饉は惱み餓孚地に滿つ、殊にリモーシェを以て慘の甚しきものなりとせり。此時ツェルゴアは不幸の衆生を救済することに孜々とて勉め、終に公費消耗し盡したる時に至りては、自ら二萬リーブルの借財を負擔して其用に充てたりき。

實は彼は熱心と誠實とを以て公共の事業に身を献せし者は未だ曾て之あらず。彼は事を命するに當り、先づ其目的を確信せしむることを勉め、以て事を爲すに誤解なからしめ、且つ其指揮に従ひ易

からしめたり。彼は何事にまれ條例とあして發布する時は、之に説明書を附して其處分の理由を公にせり。之を聞く、彼の起草せる説明書類は政治經濟の考究に大なる價值あるものなりとぞ。當時の大臣マレンシエルフ曰く、

“He had the hand of Bacon and the heart of L'Hopital.”

道德の方面より之を云へば蓋し過言に非ざるあり。

彼は獨立の勉強と探究とを以て、早く既に社會學及經濟學に就て確定せる体系を保持し、朝に立ては撓まず屈せず僻論私見を排除して、其主義を實施せたりき。然れども若し弱點^①として之を擧ぐるを得ば、彼は余りに其主義に頑固ありき、彼は實際家として柔順寛容の精神を欠けり。

評に曰く、此人にして此弱點あり。知るべし學理には無二の忠僕なりしとを。

彼大臣となるや、唯だ國家の爲に國政整理を計り、改革の事業に従ひしに、惜哉、其事業に必要な惟一の事情を欠けり、即ち王の大臣として事業に従へるツルギーを信用して之を補助し、王權を以て反對派の攻撃を切り抜け、改革の實を擧ぐるに至らざりしを返すくも遺憾あれ。

ツルギーは改革の事業に着手して、遺憾にも之を成就するを得ざりき。然れども彼の計畫せる事業の久しからずして成功せるもの多きを知る。彼たる者亦以て地下に瞑すべきなり。

眞は彼は第十八世紀の產出せる人物中の偉大なる者にして、生涯唯佛國の爲に、眞理の爲に、其義務の爲に生活せり。

ヘルムホルツ氏逝く